

今一つ變り種は、花山から日食に行つた Steinheil 鏡 (D 200mm, F 500cm) の代用鏡を、年末より年始にかけて作つた。徑209mm, 厚サ32mm の Chance の Cast disk を使用したが、F は、故中村氏の使用して居た 13cm 球面計が使用し難く、自有の6.5 cm のもので行つた爲めに、非常に困り、3回据り直して、F 496cm に迄したが、恐ろしい事には、整形中、3cm も F が短かくなつて、結局493cm のものが出来た。鏡面は Steinheil と同様、少々負修正になつたが、しかし、幾分少ない心積で、中央には山も穴も残さなかつたけれど、極く輕微な Ring が出来た様であつた。f は25に近いもので、test が氣流に邪魔され、充分な事が出来なくて、弱つた。猶、この様なものを作つた結果、長焦點の Corona-graph の如きものを作る爲めの大きな經驗を得た。1936年の日食のため、相當なものを作る心積の自分には、非常に有益な仕事であつたことを喜んで居る。

其他、近くそろそろ大口徑鏡へ手を出したく思つて居る。この方面の文献は殆んどないため、獨りで開拓せねばならない點が多い。現在、花山にある研磨器械が果して D 50cm 以上に向くかどうか？ 自分は今少し運轉に對して疑問があるが、初め 2, 3 面は駄目の覺悟で掛り、早く 60cm 級のものに對する自信を持ち度く思つて居る。

猶ほ會員相互の器械に對する便宜を考へて居る當課では、自分も或る種の觀測器械の交換希望を持つて居るし、今、當協會の有力會員の方で自用 13cm Calver 作の鏡付 Mounting 共になるべく 15cm 級の中村鏡付の Mounting (双方とも西村工作) との交換を希望されて居る。此の 13cm 鏡は今後では入手が絶對不能の名大家の作品で、長焦點を利用して遊星面の觀測等に有力な器械である。希望者は一應、花山の木邊宛に御申込願ひ度い。(上記の條件は絶對でない、故に、色々の點で御相申上る)

故中村要氏 “反射望遠鏡の研究” 目次

番號	主 題	天界通號	天界卷數	發 行 年 次
1	反射望遠鏡の種類	76	7	(1927年七月)
2	設計の規 準	77	〃	(〃 八 月)
3	接眼レンズ	78	〃	(〃 九 月)
4	接眼レンズの性能と倍率	80	〃	(〃 十一月)
5	製作 準 備	81	〃	(〃 十二月)
6	同 上 (2)	83	8	(1928年二月)
7	掘り 作 業	84	〃	(〃 三 月)
8	鏡 面 研 磨	85	〃	(〃 四 月)
9	檢 査 の 原 理	86	〃	(〃 五 月)
10	整 形 (2)	88	〃	(〃 七 月)
11	同 上 (3)	91	〃	(〃 十二月)
12	星 像 檢 査	93	9	(〃 十二月)
13	拋物線鏡について	95	〃	(1929年二月)
14	鏡形と溫度變化の關係	96	〃	(〃 三 月)
15	諸 檢 査 法	99	〃	(〃 六 月)
16	鏡 の 材 料	100	〃	(〃 七 月)
17	鏡製作について	104	〃	(〃 十一月)
附 1	46cm カルヴァー鏡	82	8	(1927年十月)
附 2	故カルヴァー氏の追憶	79	7	(1928年一 月)